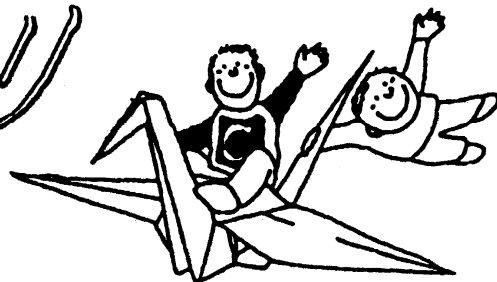


ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



チェルノブイリとフクシマを結んで

# 「救援関西」発足20周年の集い

12月18日(日) 1時半～4時半

大阪市立総合生涯学習センター・第1研修室(大阪駅前第2ビル5F)

## 《プログラム》

\*代表挨拶：山科和子

\*基調報告：20周年を振り返って(事務局)

チェルノブイリ被災地訪問報告/来年の取組みに向けて(事務局)



\*若者の取組み：佐藤努さん(弾き語り・檜葉町から千葉に避難している介護士さん)

「ゴー!ゴー!ワクワクキャンプ」実行委員

山崎玲夏さん(福井)

等

\*全体討論

◎救援バザー：購入したてのベラルーシ民芸品が沢山あります!おいしい手作りケーキもどうぞ!

今年は「救援関西」発足から20年を迎えます。又チェルノブイリ原発事故から25周年にもあたる節目の年に「フクシマ事故」が起きてしまいました。発足からの20年を振り返り、さらに訪問したてのチェルノブイリ被災地訪問報告を致します。そして福島で繰り返されてしまった原発重大事故を前にして、改めて、チェルノブイリから学ぶべき事は何なのか、チェルノブイリとフクシマを結んで何ができるのか、今度こそ繰り返さないために何が出来るのかを討論したいと思います。今回は事故後各地でいろんな活動に取り組んでいる若者達の報告もあります。是非多くの方の参加をお待ちしています。



## フクシマ後、初めての現地訪問

# 「チェルノブイリとフクシマを結んで、今、何をなすべきか…」 託された支援と宿題を抱えて行ってきます

事務局：振津かつみ



クラスノポリーエの町

12月3日から13日まで、皆さんから託された支援カンパやおみやげと、そして「宿題」を抱えて、ベラルーシの被災地を訪問します。毎年訪問しているモギレフ州の汚染地、クラスノポリーエとチェリコフ（病院、幼稚園、学校、障害者センターなど）、ベリニチの寄宿学校、そしてミンスクの「移住者の会」を訪問する予定です。昨年、脳腫瘍で亡くなられた「移住者の会」のターニャさんの墓参もし、ご家族にもお会いしてきたいと思います。また、情報収集のため、

ミンスクの研究所なども訪問できればと考えています。（別記、予定表）

3月11日の東日本大震災と東京電力福島第一原発事故後、初めてのベラルーシ訪問です。私たち「救援関西」は、これまで20年間にわたって、チェルノブイリのヒバクシャへの支援に取組み、交流を通じて原発重大事故の被害について学び、そしてヒロシマ・ナガサキのヒバクシャ、またJCO事故被害者と、チェルノブイリのヒバクシャとを結んで、「繰り返さないで！チェルノブイリ」と日本の原発の危険性、地震国日本での原発の危険性を訴える活動にも取り組んできました。そんな中で、ついに起こってしまった東京電力福島第一原発の事故。このような事故が起こることを、未然に防げなかったことへの後悔と悲しみを感じ、また、「フクシマで最後にしなければ」と「脱原発」の運動にもさらに積極的に参加してきました。そして、「チェルノブイリ支援の経験を活かしてフクシマ支援のために何ができるだろうか」と、模索してきました。チェルノブイリの支援のひとつとして取り組んできた「ノボ・キャンプ」の経験から、この夏、京都で若い人々が取り組んだ、フクシマ事故被災地の子どもたちのための「ゴーゴー！ワクワクキャンプ」への支援を決め、資金カンパ、ボランティアスタッフへの「救急医療の講習」、滞在中の子どもたちの「健康チェック」などにも、ささやかながら協力してきました。

「史上最悪の原発事故」とも言われたチェルノブイリに並ぶ放射能汚染が、フクシマ事故によって引き起されてしまったことが次第に明らかになってきました。事故の経緯、放出された放射性物質の量と組成、土壌や地形の違い、被災地の社会的条件の違い、情報の公開や政府の対応の違いなどがありますが、「汚染地域」となってしまった福島を中心とする東日本の被災地では、チェルノブイリの汚染地と同じような事態——原発周辺地域から家や財産を全て置いて着の身着のままでの避難、30キロ圏外にも広がった汚染地からの避難、住環境の汚染と住民の日常的な被曝、これから顕在化する可能性のある健康問題、食物の汚染、森や生態系全体の汚染、事故処理に従事する作業員の被曝、等々——が進んでいます。

私自身は、医師として、チェルノブイリ支援に20年間関わってきた者としても、フクシマの被災地で自分に今できる限りのことをしなければ…という思いで、4月以降、度々現地を訪れ、「健康相談」などにも取り組んできました。フクシマ現地の抱える問題は、多岐にわたります。謂れのない汚染と被曝を

強いられている人々、避難を余儀なくされた人々、引き裂かれてしまった家族や地域の絆…被災者の方々の置かれている条件も様々です。そのひとつひとつに直面し、「チェルノブイリでは、子どもたちはどんな症状が出たのですか?」「補償や避難は?」「汚染食品の管理は?」「これから生まれてくる子どもたちは?」…と問われます。そんな中で、私も「ベラルーシの友人たちは、どのようにして事故直後の困難を乗り越えてきたのだろうか」と度々自問しました。私が初めてチェルノブイリの被災地を訪問したのは事故後5年目、ちょうど20年前の春です。事故直後のことは、いろいろと話しには聞いていますが、リアルタイムで体験していません。実際のところ、事故直後のことについては、具体的に知らないところも多くあることに改めて気づかされました。やはり、どこか「過去の大変な体験」としてしかチェルノブイリのヒバクシャの話しを聞いていなかったのではと、反省しています。

今回の現地訪問では、改めてチェルノブイリのヒバクシャの友人たちから、事故直後のことも含めて事故後の実情——汚染地の子どもたちの健康状態、補償や手当、医療や検診、移住に伴う支援や移住後の就労、汚染食品や体内汚染の実情と規制値の変遷、子どもたちへの放射線教育、被曝リスクを減らすための生活の知恵、社会的差別の問題など——「チェルノブイリ・ヒバクシャの体験」をより具体的に詳細に聞いてきたいと思います。そしてその経験や教訓を、フクシマ事故の被災者の今後に活かすことができればと思います。

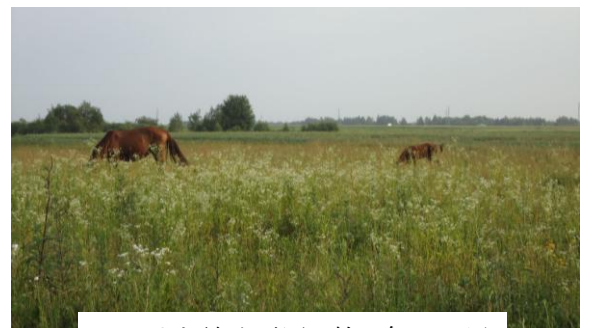


ベアラさんご夫婦・アモーゾフさん・リューダさんと

ベラルーシの友人たちは、フクシマ事故後の被災地、日本の私たちのことをとても心配してメッセージを送ってくれました。また、事故から数ヶ月経つと、ベラルーシでは福島事故の報道もほとんどされなくなったとのことで、「その後、どうなっているの?」と、また心配してくれて、日本からの情報を待っています。フクシマの被災地の状況もお知らせし、今後、チェルノブイリとフクシマとを結んで、連帯して何ができるかも議論をしてきたいと考えて

います。そして、できれば来春の「チェルノブイリ26周年」には、クラスノポーリエの小児科医ベアラさん、チェリコフの教師バーリャさんに来日して頂いて、フクシマと一緒に訪問し、被災者の方々とも直接にも交流して頂き、また関西、福井などでも交流ができるよう、来日の依頼をしようと、先日の「運営会議」で確認しました。

チェルノブイリから25年。被災地の医師や研究者からは、小児甲状腺癌以外にも被ばくによる人々の健康被害を示唆する様々な貴重な報告が、これまでもなされています。しかし、そのほとんどが「国際原子力機関」(IAEA)など原発を推進する勢力によって無視され、また「ストレス、社会経済的要因によるもの」と決めつけられ、「被ばくによる他の健康被害はなかった」かのように扱われてきました。ヒロシマ、ナガサキでは25年以降も癌や癌以外の疾患が増加しましたが、「放射線影響研究所」による10万人以上の被爆者の追跡調査で、これらが被ばくによる晩発性障害であることが疫学的に証明されるには数十年にわたる調査研究を要しました。その間に多くの被爆者が、被ばくとの関係を認められないまま健康を害し命を奪われたの



クルリと続く平原・放し飼いの馬



です。チェルノブイリでは、WHOの研究機関である「国際癌研究機関」(IARC)が、事故処理作業従事者、移住者とその子ども達を含む「寿命調査集団」を対象とし、癌と循環器疾患などを調査する新たなプロジェクト「チェルノブイリ事故の健康影響の戦略的調査課題」を2009年にやっと提案しましたが（まだ実施されていない？）、健康被害の全容の「本格的な疫学的証明」はこれからではないかと思えます。チェルノブイリでもまだまだ課題が山積みです。私たちのチェルノブイリ支援活動も、息長く続けねばなりません。



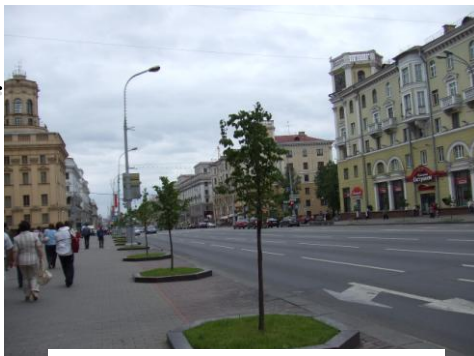
病院で贈った吸入器の使い方を説明

今、始まったばかりのフクシマでも、被害者の健康と命を守り、今後の健康影響を科学的に解明することが求められています。その作業は、「直ちに健康上問題ない」「100ミリシーベルト以下の被ばくでは明らかな健康影響が証明されていない」「今後出ると考えられる健康影響は小児甲状腺癌だけ」「その他は、ストレスや不安によるもの」という「見解」、原子力推進と密接に結びついているこれらの主張を厳しく批判することなしには進めることはできません。

ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリとフクシマを結んで、ヒバクシャとの連帯の中で、今何ができるか、これから何をしなければならぬか…その問いへの答えの「いとぐち」を探りながら、現地訪問に行ってきます。12月18日の「発足20周年の集い」で現地訪問報告もしますので、ぜひ、ご参加下さい。皆さんとの今後の議論の中で、深めてゆきたいと思えます。そして「フクシマを核時代の終わりの始まりに」するために、皆さんと、ベラルーシの友人たちとも、力を合わせたいと思えます。

**現地訪問日程：**

12月3日 関空発	ヘルシンキ
4日 ミンスク着 「移住者の会」交流	ミンスク/マリノフカ泊
5日 ミンスクで研究所など訪問 バザー用品買い出し	ミンスク/マリノフカ泊
6日 クラスノポリエへ移動 ベリニチ訪問	クラスノポリエ泊
7日 クラスノポリエ交流（病院・学校・幼稚園・障害者センターなど訪問）	クラスノポリエ泊
8日 クラスノポリエ交流	クラスノポリエ泊
9日 チェリコフ交流（幼稚園・社会保護施設など）	チェリコフ泊
10日 チェリコフ交流	チェリコフ泊
11日 ミンスクへ移動	ミンスク/マリノフカ泊
12日 ミンスク発	機内泊
13日 帰国	



ミンスクのメインストリート

## 10・26反原子力デーの日の申し入れに関西電力は・・・

10月26日の「原子力の日」に市民グループ30人余りで関電に申し入れ行動を行いました。「フクシマ事故」が起こっても原発推進を変えようとしない関電に対して、各グループがそれぞれに抗議の申し入れ書を読みあげて回答を迫りました。しかし全くの無言ままで、感想をと問われても無言のまま。呆れるばかりです。8ヶ月半経っても事故が未だに収束しない福島原発重大事故。福島など被災者の人々の苦悩、「除染か移住か」の苦渋の選択、放射能への不安、家族の崩壊、地域社会の崩壊、「あの原発さえなければ」の思いは全く他人事なのでしょうか。関電は自社の原発は安全だと本当に思っているのでしょうか。

関電はせっせと新聞・チラシを使って、原発が再稼働せずに残りの原発も定期検査に入れば冬に電力不足が起こると節電を呼びかけています。しかし今回の交渉でも電力のベストミックス「原発50%」と答え、それを見直すことすら検討していない、従来の路線で行くと高飛車です。市民の望んでいる脱原発、再生可能エネルギーへの転換など全く眼中にありません。さらに交渉時、監視カメラが働いていた事が分かりました。そういえばいつ頃からだったか、交渉に入る前に必ず受け付けで名前を書かされるようになっていました。監視カメラが設置されている事の追求に、総務課マネージャーはビルの建物管理のためにモニターしているのであり、録画・録音はしていない、と言い張り、広報は「モニターの存在は知らなかった」と弁明していました。

何を言われても答えずひたすら沈黙。そして一方では監視カメラ……。こんな傲慢な市民を愚弄した関電の姿勢は到底許されるものではありません。

又、最近関電の森会長がベトナムで「『・・・信頼性の高いプラントの輸出は日本の責務』国内の原発は『日本の技術を維持するためにも必要』と強調した。」と報じられました(11月22日朝日新聞)。「フクシマ事故」の後も自らを省みることもなく、市民の声に耳も貸さず、日本の電力会社のトップランナーとしてがむしゃらに原発を推進し輸出しようとする関電の姿が本当に空恐ろしく感じます。原発の再稼働を許さず、海外への輸出を許さず、脱原発の声を大きくしていかなばなりません。

2011年10月26日

関西電力株式会社社長 八木 誠 様

### 反原子力デーに際しての申し入れ

チェルノブイリ原発重大事故から既に25年が経ちましたが、被災地では今も放射能汚染の中で、被曝しながらの生活が続いています。私達が支援・交流を続けているベラルーシの汚染地でも、事故後の地域経済の低迷に伴う生活困難も加わり、住民の健康状態の悪化が報告されています。そして、被曝による健康被害は今後も長期にわたります。原発重大事故による取り返しのつかない放射能汚染と被害を前にして、私達は貴社に「チェルノブイリを繰り返す前に原発を止める」ように再三要請してきました。

3月11日に東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所で重大事故が起こり、7ヶ月半が経つ今も事故は収束していません。既にチェルノブイリ原発事故の30%、広島型原爆の約168発分(セシウム137で比較)に相当する大量の放射能が放出され、大地を空を海を汚染しました。福島県では、県の半分以上が「放射線管理区域」のレベル以上に汚染され、百万人を超える人々がその中で生活を余儀なくされています。困難を極める除染作業。行き場の決まらない放射性廃棄物。壊滅的な被害を受けた産業。生活を奪われ、故郷を奪われ苦悩する人々。放射能汚染の中で生活する不安。さらにその汚染は東日本の広範な地域に広がっています。

貴社は原発が全て止まれば最大11.5%の供給不足が生じるとして、10%程度の節電を要請する方向で

調整していると報じられています。「またか」と怒りを禁じ得ません。今夏も原発が止まれば供給不足に陥るとして15%の節電を呼びかけましたが、実際には電力は足りていました。又電力のベストミックスとして「原発50%」と言っただけ、フクシマ事故が起こってしまった後も、あくまで原発を推進しようとする貴社の傲慢な態度には、全く開いた口がふさがりません。

若狭でもいつ大地震が起きても不思議ではありません。貴社の原発は安全とでもいうのでしょうか。「たかが電気のために、これほどのリスクを受け、過酷な避難と放射能に怯える暮らしを強いられてよいのだろうか。」「あの原発事故さえなければ」と怒りと苛立ちの中にいる福島の方々に貴社はどうか答えられるのでしょうか。

即刻、貴社の全ての原発を停止し、再生可能エネルギーに転換するよう、下記申し入れます。

#### 記

1. 貴社の現在稼働中の原発を即刻運転停止し、11基の全原発を冷温停止状態にしてください。30年超の老朽原発を閉鎖し、脱原発にシフトしてください。
2. 敦賀3・4号炉建設計画を中止し、日本原電から出向社員を引き上げて下さい。
3. すでに破綻している核燃料サイクル開発を中止し、原子力予算を大巾に削減して復興予算に回すように政府に進言してください。
4. 国際原子力開発株式会社への出資を止め、官民一体となった「原発システム輸出」を止めて下さい。
5. テレビ・新聞・広報誌等で、これまでの原発安全宣伝を撤回・謝罪し、脱原発を促し、再生可能エネルギー開発に力を注ぐ事を宣伝してください。

以上

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

### ～お知らせ～

#### \*—「放射線」副読本を切る一批判学習会

- ・12月23日（金）午後1時半～ ・エル大阪 501号室（地下鉄谷町線「天満橋」下車5分）
- ・主催：若狭連帯行動ネットワーク 地球救出アクション97 ヒバク反対キャンペーン

カンパ・会費の納入ありがとうございました！！

10月22日～11月30日

木村英子 小村幸子 江端久美子 川原重信 鎌橋照子 木下桂子 久保きよ子 住吉純子 森本良子 岡村達郎  
山田耕作 植田成人 城晶子 藤田達 水越純子 富田洋香 齋藤充子 大田美智子 荒川千恵子 田坂富士男  
松本郁夫 岡田由江 山科和子 長澤由美 （但し敬称略・順不同）

引き続き御協力をよろしく願います！

ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

〒546-0031 大阪市東住吉区田辺1-9-12 山科方

郵便振替：00910-2-32752

